

中澤岩太と近代美術工芸

並木誠士（京都工芸繊維大学）

本発表の目的は、京都高等工芸学校初代校長の中澤岩太（1858-1943）が日本の近代美術工芸史上に果たした役割を明確に示すことである。

中澤岩太は、東京帝国大学工科大学教授、京都帝国大学工科大学長をつとめた材料化学を専門とする化学者であり、セメント・コンクリート・ガラスなどの分野において大きな業績を残しているが、美術工芸に関する業績については、これまで十分に研究されていない。美術工芸に関連する中澤についての先行研究としては、宮島久雄『関西モダンデザイン前史』（中央公論美術出版、2003）、米屋優「中澤岩太と京都の美術工芸」（『京の美学者たち』晃洋書房、2006）、「中澤岩太の美術工芸観」（『デザイン理論』50、2007）、和田積希「教材としてのガラススライド：京都高等工芸学校初期における海外デザインの受容」（『デザイン理論』75、2020）がある程度である。

しかし、近代京都における中澤の活動は、関西美術会会頭、遊陶園・京漆園園長、関西美術院院長などをつとめ、また、洋画家浅井忠を京都高等工芸学校に招聘するなど、重要な事績が多く、さらに、明治40年に開設された文部省美術展覧会（文展）の第1回展で日本画部門の審査長の重責をつとめており、京都にとどまらない活躍をしている。しかし、化学者であるということもあり、文展審査長の件にしても、岡倉天心や東京美術学校長正木直彦との関係も含めて、これまで近代美術史の文脈で論じられることはなかった。

本発表では、①化学者としての美術工芸界への貢献、②海外資料の積極的な紹介者としての活動、③美術工芸のネットワークの中心として役割、という三つの視点から中澤の業績を再検討して、近代美術工芸史におけるその位置を明確にすることを目的とする。

①に関しては、東京時代における博覧会・共進会での審査経験や京都市陶磁器試験所の顧問としての活動から、明治時代後期の窯業を中心とする美術工芸の近代化に中澤の化学者としての知見が役立ったことを指摘し、これまで近代美術史のなかで抜け落ちていた「化学者」の役割について確認する。②については、京都高等工芸学校、関西美術会、京都美術協会などの場で、「参考品」として海外の美術工芸品を積極的に公開している事例を紹介して、その影響の大きさを指摘する。③については、関西美術会、京都彫技会をはじめ、遊陶園、京漆園などの美術工芸に関連する組織・団体の中心にいる中澤の姿を示すことにより、その中澤の活動自体が結果的に京都の美術工芸の近代化を進めた点を明らかにする。また、東京と京都の美術工芸界の橋渡しとして果たした役割についても指摘したい。